

日本一輝いているまちづくりと二つの人口増戦略
軸は豊かな自然と調和するモノづくり・人づくり東京オリパラで世界に発信された
《メイド・イン・ツバメ》

新潟県の2大都市、県都・新潟市と長岡市の中間点にあり、信濃川流域に形成された広大な越後平野のほぼ中央部に位置する燕市は、平成18(2006)年3月、旧燕市・旧西蒲原郡吉田町・同分水町との1市2町の合併により、新燕市としての歩みを開始した。

越後平野は言うまでもなく、日本有数の穀倉地帯だ。そのただ中にある燕市もまた、「米どころ・越後」の一翼を担っている。

だが、周知のように燕市の名は、金属食器類、中でも全国生産量の90%以上のシェアを誇る、洋食器類や金属調理器類(ハウスウェア)などの生産地として、より広く知られている。令和3(2021)年夏に開催された2020東京オリンピック・パラリンピック(以下、東京オリパラ)に際しては、選手村

食堂に燕市側の無償提供による洋食器(おも

てなしカトラリー/ナイフ・フォーク・スプーンのセット)が採用された。このことにより、既に国際的な評価を得ていた《つばめブランド》の名声は、改めて世界的レベルで認知されたといえるが、オリンピック・パラリンピックの選手村食堂で使用される食器類は、近年、プラスチックなどの合成樹脂製が主流だった。いろいろな意味での効率性、特に洗浄の手間を省く意味合いなどによる措置で、東京オリパラにおいても当初はプラスチック製食器類の採用か、2016リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックで見られた「プラスチック製食器中心、一部金属食器採用」が、既定路線だったという。

その既定路線に風穴を開け、全面的な燕市製の金属食器採用が実現できたのは、日本を代表する金属食器生産地・燕市の産業界と、行政の連携による地道で、粘り強い努力と情熱のたまものだった。

つとむ
鈴木 力
すずき
鈴木 市長

「燕市の金属製カトラリー(以下、おもてなしカトラリー)を東京オリパラ

で採用していただく取り組みの準備を始めたのは、平成25(2013)年11月。東京オリパラ開催の決定はその年の9月ですから、決定を受けてすぐに行動を開始したことになります。

『つばめ《東京オリンピック・パラリンピック》プロジェクト』(愛称/燕のおもてなしプ



市域の随所で田園地帯と工業団地が溶け合う燕市ならではの環境



取材当日に開催されていた「燕三条ものづくりメッセ2022」(燕三条地場産業振興センター)には、金属加工産業関連の企業や団体約200社が出展



燕市における金属加工産業の歴史が概観できる「燕市産業史料館」

しかし、それ以上に私たちが力説したのは、金属製カトラリーを使うことで、世界中から集まるアスリートたちに日常生活の重要な基本要素である『おいしくて心身に滋養のある食事』を、選手村食堂を通じて楽しんでいただきたい。その結果、競技パフォーマンスの向上にも何らかの貢献ができるのではないかと。さらに、閉会後のカトラリーの使い道など、いわゆる『レガシーの継承』についても、独自のアイデアや構想を提示させていただきました(鈴木市長)

燕市側の用意したおもてなしカトラリーのデザインは、日本金属洋食器工業組合の会員

プロジェクト」という名称のチームを、燕市と地元業界団体(日本金属洋食器工業組合・日本金属ハウスウェア工業組合・協同組合つばめ物流センター)および、燕商工会議所(※旧燕市地区)、吉田商工会(※旧吉田町地区)、分水商工会(※旧分水町地区)との官民連携で立ち上げ、それ以後、足かけ7年間にわたり、オリンピックの関係諸機関に何度も何度も働き掛け、令和元(2019)年8月末ようやく、採用が決定したのです」

そう語るののは鈴木力燕市長だ。鈴木市長は大学卒業後の昭和58(1983)年4

月に新潟県に入庁。各部署の要職を歴任(最終職務は新潟県知事政策局政策監)後、平成22(2010)年1月に退職、同年4月に実施された燕市市長選に出馬し、当選した。取材時の令和4(2022)年10月21日は、4期13年目のちょうど半ばに当たる。

「私たちが燕産の金属製カトラリー採用を要請する際に強調したのは、まず燕市の洋食器類のシェアが国内最大であるという誰もが認める実績でした。さらに、洗浄の手間を惜しまなければ何度も再使用できる金属製カトラリーなら、世界的に問題になっている廃棄物の削減に貢献できるということ。ひいては持続可能な社会(脱炭素社会)の構築を目指すSDGsの理念にもかなっているといった、環境面での貢献ももちろん大きなアピールポイントでした。



企業から募集して決めた。食習慣や体格なども大きく違う、各国代表の選手のうち誰が違和感を持たないような、適切な大きさや重さ、手になじむ形などを徹底追求した上で、新潟県の鳥であるトキが飛翔する際の翼の意匠を表面に、桜の意匠を裏面にあしらうデザインを採用した。

そうした選手ファーストの工夫と共に込められた、燕市側の「想い」は、もちろん、燕市の地場産業の根幹である金属食器類の品質の良さ、使



2020東京オリパラで使用されたメイド・イン・ツバメの「おもてなしカトラリー」



大河津分水には二つの堰(写真左・大河津可動堰、写真右・大河津洗堰)があり、水量調節を随時行う

い心地の素晴らしさを、各国代表の選手たちを通じ、世界に改めて発信していきたいというところにあった。

燕市のおもてなしカトラリーは実際、各国選手たちに大好評を博した。燕市が無償提供したカトラリーは、各国選手たちなどが約3割に当たる数を記念に持ち帰ったという。燕市は当初から「ある程度の持ち帰り」を想定。それを見込んだ量のカトラリーを納入してもいた。だが「予測を超える持ち帰り」の多さは、何よりも選手たちによる高評価の客観的な証しだ。

燕市にとってそれは、選手村食堂へのおもてなしカトラリー採用に至るまでの、市を挙げての長年の努力が報われたことを端的に実感できる成果であり、同時に地場産品への改めての自信を得られた、重要な経験でもあっただろう。

まちづくりの近代化は100年前の大河津分水の通水から

燕市内を移動してよく目にする印象的な風景が三つある。金属加工関係の事業所や

工業団地の集積の多さと、その周囲に展開する水田の豊かさ、市街地を縦横に流れる信濃川水系の多彩な河川風景だ。

冒頭にも述べたように、燕市は世界に冠たる金属食器類の生産地であると同時に、日本を代表する米どころ・越後平野の中央部に位置する田園地帯だ。この地に金属加工業が芽生えたルーツは、400年以上も前に農家の人々が副業に始めた、金属製の和釘づくりにあるという。

それが歴代受け継がれ、次第に本格的な金属加工産業へ成長していくわけだが、米作りと金属加工産業の二本立てという、現代に至る産業構造を実現した最大の要因は、一つには信濃川水系の豊富な水資源の活用にあった。そして、もう一つの要因は信濃川の「多すぎる水量」を、100年間にわたりコントロールしてきた《大河津分水》の存在にある。

「近代以降の燕のまちづくりは、暴れ川・信濃川の水流を制御するために開削された、全長9.1kmの大河津分水の存在に負っています。大河津分水が完成する以前の信濃川は、分流の中ノ口川なかのくちも含め、3年に1度の頻度で洪水が発生したとされるほどで、信濃川の流量を分水・制御する治水事業の計画は、江戸時代から明治時代半ばまでに、何度も検討されました。しかし、当時の土木技術では



大河津分水が通水に至るまでの経緯を詳しく記した「信濃川治水紀功碑」(信濃川大河津資料館横)

工事が難しかったり、分水開削で想定される多方面への影響の解決策が見つからないなど課題が多く、実現には至りませんでした。

そうこうするうちに、明治29(1896)年7月、信濃川の堤防が決壊。『横田切れ』と呼ばれる史上最悪の洪水災害が発生します。燕を含む西蒲原郡全体で死者が43人以上、家屋や田畑の流失被害も甚大でした。また、浸水田畑の総面積5万8254haは、当時の越後平野の田畑の80%を超えており、その後3カ月以上も越後平野全体が泥沼の様相を呈したため、伝染病も発生しました。

事ここに至って、国も県も信濃川の分水化に本腰を入れるようになりました。最終的には明治42(1909)年に開削工事を開始。大河津分水は今からちょうど100年前、大正11(1922)年8月に通水しました(正式な竣工しゅんこう式は大正13/1924年挙行)。

それ以後、洪水は激減し、湿地帯のよう

だった大地も、近代的なまちづくりが可能な状態に改善されていきます。水田地帯と金属加工を中心とする工業立地とがバランスよく同居する、今日の燕市のまちづくりは、まさにこの大河津分水の存在なくしては語る事ができないのです」(鈴木市長)

燕市の全域図を見ると、長野県側から流れてきた信濃川(長野県内では千曲川)と、上越新幹線・燕三条駅の手前(長岡市および東京方面から見ても)で分流する中ノ口川が市域東側を蛇行するように流れていること、信濃川と中ノ口川の分流地点手前から開削された大河津分水が、信濃川の流路を大きく枝分かれさせ、燕市および隣接する長岡市の市域を交互に通過しながら、日本海(長岡市寺泊地区付近)に注ぎ込んでいる様子などが、一目瞭然で分かる。

信濃川の水量が非常に多い(日本一との説も)ことに加え、沿岸地方に洪水災害が多かった背景には、越後平野の地形が大きく影響している。そもそも越後平野そのものが、信濃川や阿賀野川などが運んだ土砂の堆積で形成された沖積平野であること。そのため川の水面より低い低湿地が多かったこと。さらに、越後平野の西側には弥彦山や角田山が連なり、海際の沿岸部には標高20mほどの砂丘が延々と続いていたことなどから、平野部は完全な盆地状を形成。大河津分水開削以前の信濃川は、洪水がひとたび起きると、水が容易に引かない「こもり水」の発生しやすい地形を

呈していた。

しかし、信濃川と中ノ口川の分流地点の手前から、大河津分水が開削されたことで洪水は激減。鈴木市長の談話にもあるように、田園地帯と工業立地が見事に両立し、近代的な市街地がバランスよく展開する今日の燕市の「土壌」が築かれた。それは新潟市・旧白根市(現新潟市)・三条市・長岡市・小千谷市など、特に中越地方から下越地方に至る、信濃川・中ノ口川沿岸のかつての「洪水・氾濫多発地帯」全域のまちづくりにも、多かれ少なかれ言えることだ。

「ここで見逃せないのは、大河津分水開削に大きな力を発揮した長善館の人々のことです。長善館は市内の粟生津地区に、幕末の天保時代から明治時代にわたって存在した私塾

です」(鈴木市長)

私塾長善館は粟生津村の医師の家に生まれた鈴木文臺(ぶんたい)によって天保4(1833)年に創設された漢学塾で、閉校した明治45(1912)年までの80年間で1000人を超える門下生を送り出された。

初代館主・鈴木文臺は18歳の頃、地元の庄屋で「論語」などを講義していたが、越後の名僧・良寛(出雲崎生まれ、1758~1831年)にその才能を絶賛された。その後2人は良寛の暮らす国上山の五合庵などで交流を持ち、文臺は良寛から慈悲の心、平等の心、公平無私の心などを受け継いだとされる。

長善館では「学問とは困っている人々を救うための学びである」「学んだことを実行してこそ価値がある」というブレない教えを基に、歴



大河津分水開削への貢献だけでなく、地域の発展に幅広く尽力した長善館の人々の足跡を展示する燕市長善館史料館



令和4年11月に開催された大河津分水通水100周年記念「分水サミット」の様相



令和4年8月27日に開催の「大津分水サクスフェスタ」では桜の記念植樹も実施(列の真ん中は鈴木市長)

代3人の館主の下、多くの門下生たちを導いていった。

「横田切れ」の際には、その門下生たちの中から、時の政府に大津分水建設の請願などに尽力した者、洪水による伝染病の克服のために力を果たした者などが次々に輩出するなど、地域に対する貢献の大きさは計り知れない。そういう意味合いからも、大津分水はまさに、良寛の思想、長善館の教えなどがバックボーンとなり、実現した一大社会事業ともいえる。

「日本一輝いているまち」への挑戦と「三つの人口増戦略」

良寛から長善館の人々を経て醸成された、常に「地域の視点」でまちづくりを学び合い、実践し合うという考え方の系譜の一端は、例えば、燕市における次世代のまちづくりへの参画を促進する《つばめ若者会議》などの事業にも、継承されている。

「つばめ若者会議」は平成25年、市内に暮らす若者たちのまちへの参画意識を高めるため、私が市長に就任して4年目に立ち上げた事業です。私の市長就任は合併から5年目のことでしたが、合併以後の燕市の状況を、県庁職員・燕市民の立場から見ていて痛感させられたの

は、一体感がないなあ、ということでした。

当時の燕市は合併直後ということもあり、市庁舎建設の是非をはじめ、さまざまな局面で、各地区の意見がまとまらない状況を呈していました。まさか、その燕市の市長になるなどとは全く考えてはおりませんでした(笑)、それでも地元の方たちからの熱心なお勧めを受け、最終的に市長選に出ました。その際に、私が就任後に最もやりたいと考えていたことの一つが、とにかく合併して日の浅いまちの市民や職員の気持ちのベクトルを未来に向けるよう、なんとか一つにまとめていきたいということでした(鈴木市長)

そこで鈴木市長が就任後、真っ先に打ち出したのは、現在も燕市政のスローガンの一つとなっている「日本一輝いているまち・つばめ」実現に向けた、各種の取り組みの必要性だった。

次世代の若者によるまちづくりへの参画は、そのために不可欠なポイントの一つだ。事業開始から令和5年で満10周年を迎えるが、つばめ若者会議は「理想とする燕市の将来像を実現するためのアイデア考案」「若者のまちづくりに対する意識の醸成」「若者同士の交流によるつながりの強化」などの主要目的の推進に、大きな効果を発揮している。



つばめ若者会議の活動の一環で、高校生たちが地元ラジオ局のパーソナリティーとしても活躍



つばめ若者会議では若者たちが集まってさまざまな活動を主体的に企画する(写真はミーティングの様態)

つばめ若者会議は、燕市を愛し、まちのために必要なことや大切なことを創造し、主体的に活動する40歳以下の若者で構成されている。チームごとのプロジェクトをメインに活動の幅を広げており、複数のチームがある。中でも「燕市役所まちあそび部(高校生)」の活動は、令和5年1月に総務省「令和4年度ふるさとづくり大賞」で優秀賞(総務大臣表彰)を受賞している。

また、新潟県外在住の燕市出身者と燕市に興味を持つている若者を対象にUIJタインの推進を目的とする「つばめいと」事業を平成27(2015)年から実施し、各種交流イベントを中心に事業を展開している。令和2年4月の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の発出時には、地元企業と連携し、全国に先駆けて燕市出身の若者たちに地元産のお米などを送る「ふるさと燕」大学生等応援事業を実

燕市

(新潟県)

市 政 報



「道の駅SORAIRO国上」にはメイド・イン・ツバメのデイキャンプ用品も多数取り扱っている。デイキャンプ施設も併設され人気のスポットだ



燕三条地場産業振興センター・物産館は燕市および隣接する三条市の洋食器、キッチン用品、刃物、工具などを展示即売して大人気

施し、全国から注目を集めた。燕市はインターシップの受け入れにも積極的だ。ものづくりのまちで、分業制で産地が形成されているため、さまざまな業種の中小企業が立地する地域特性を生かし、産学官が連携して、平成28（2016）年からインターン生の受け入れ推進事業「つばめ産学協創スクエア事業」を実施。「公益社団法人つばめいと（令和3年・地域再生大賞・準大賞を受賞）」が市内企業からの寄付金を原資に設置した、インターシップコーディネーターが常駐する宿泊・交流施設を有する強みを生かし、国内外から多数のインターン生が燕市を訪れている。

つばめ若者会議事業、つばめいと事業、つばめ産学協創スクエア事業は、地域の若者たちには地元愛の醸成を、故郷を離れた若者た

ちにはUターン意欲の醸成を図り、将来的にIターンや関係人口になる可能性のある全国の若者たちには燕市への関心を促す、実に興味深い取り組みといえる。

「私たちが打ち出し、目指している『日本一輝いているまちづくり』は、さらに金属食器など『つばめ産業ブランド』の発信拡大、子どもたちの文化活動やスポーツ活動の促進、市民活動の推進、地方創生事業の活発な実践など、多方面にわたっています。それらの事業を総合した狙いは、人口減少の抑制をはじめ、近未来の持続可能なまちづくりへとつながっています」（鈴木市長）

燕市の人口は令和4年10月末現在で7万7480人、ピークは平成12（2000）年の8万4297人（合併前の燕市エリア）だ。減少率は全国的に見ても低い水準といえるだろう。それでも燕市では、「定住人口増」「活動人口（活動的な市民）増」「交流・応援人口増」の《三つの人口増戦略》を持続可能なまちづくりの軸に据え、先人が築いた土壌の上に、モノづくりと人づくりを基盤とする各種の活性化施策を、精力的に展開している。

ところで先に触れた、東京オリパラの選手村食堂に納入した「おもてなしカトラリー」に関する「レガシーの継承」は、その後どうなっ



上越新幹線・燕三条駅前子どもたちと遊ぶ良寛像



燕三条駅構内にも燕の金属製食器・調理器具などの展示・販売コーナーが。品ぞろえはちょっとした専門店並みだ

ているだろう。報道によると選手村に納入されたスプーン、フォーク、ナイフ（約2万5000セット）のうち、約1万7000セットが令和3年10月に里帰りしている。

「里帰りの直後から随時、学校給食や子ども食堂などでの活用、障害者福祉サービス事業所での活用、高齢者福祉施設での展示などのほか、産業・観光面で交流の深い山形県南陽市への無償貸与もさせていただきました。さらに、体育系学生の多い自衛隊体育学校や鹿屋体育大学、東京国際大学などの学生食堂への貸与、各種イベントへの貸与など、さまざまな形でレガシーの継承を図ると同時に、燕市産の金属食器類のPRにも活用させていただいております（笑）」（鈴木市長）

以上見てきたように、何事においてもアイデア豊富な取り組みが光る、燕市のまちづくり。これからの「さらなる成果」が、大いに期待される。

（取材：文〓遠藤隆／取材日〓令和4年10月21日）